

活動報告

落語のような『谷繁』

追手門学院大学笑学研究所所員、社会学部准教授 横田 修

○はじめに

『谷繁』とは、私が2012年に描いた不条理劇である。昨年、私が主宰する劇団にてもう一本の短篇と合わせて上演した。2016年に追手門学院大学社会学部と産学協働人材育成機構 AICE の共同主催にて実施した舞台表現プロジェクト（通称 STEP）第一回公演の演目でもあるから、ご覧いただいた奇特な方もいるかもしれない。

さて。そんな演目『谷繁』について、落語を切り口に語るのが本稿の目的である。本来、落語と演劇は異なる表現ジャンルであるが、演劇の中身を紙面を通して伝える上で、落語が良いフックになるのではと考えた。あくまで演目『谷繁』についての紹介がメインである。

それにしても、拙作について自身で語るとは身もフタもない話である。しばし笑ってお付き合い頂きたい。

○「落語みたい」な芝居

以下、公演企画書に書いた紹介文である。

訳ありの引っ越し屋でバイトする男と女。ある夜、仕事先で「ハイキ」の紙が貼られたソレと遭遇する。何ゴミなのかと迷っていたら、ソレはおもむろに動き出して・・・不条理な表題作『谷繁』ほか、馬鹿馬鹿しさ満載の落語チックな短編集。

“落語チック”とは、落語好きの方にお叱りを受けそうな表現である。しかし当時、確かに私は落語みたいな演目を創りたいと考えていたのだ。果たして、落語みたいな演目とは何だろう。以下、麻生芳伸編『落語百選 春』のまえがきからの引用である。



身近に、面白い、楽しいことがあると、人は「落語みたい」だと、よく言う。「落語みたい」という表現の中に、「ばかばかしい」「他愛ない」「呆れた」「尋常ではない」・・・等々の意味も含まれている。(麻生芳伸編 1975『落語百選 春』、三省堂)

この麻生の説明には、多くの方が同意してくれるのではないか。まえがきは以下の様に続く。

つまり、今日、われわれの社会、日常は、この「落語みたい」なことによって成り立ち、支えられていることのほうが多いのではないか。・・・時代が移り、人間が知恵を積み機会がすべてを可能にしても、人間は、面白い、楽しいことが好きであり、それを貪欲に追い求め、「ばかばかしい」「他愛ない」・・・ことを含めて、それが心の糧となり、日常を支える力^{エネルギー}になっていることに、変わりはない。

まえがきがながくなったが、面白い、楽しいということは、その事柄と^{かわり}交渉をもつことによって生じる、人間の感性の営^{いとなみ}為であり、その面白く、楽しいことは、より多くの人びとが共有することで、いっそう精彩を放つ。——大衆の娯^{エンターテイメント}楽としての「落語」が、今日なお、そうした人びとの想いを反映しているところに、普遍性がある。(同上)

麻生の書く大衆の娯^{エンターテイメント}楽としての「落語」こそ、私が創りたかった演目のモデルである。その条件を、麻生の言葉から私なりに導くと以下になる。

- ① 身近にある面白く、楽しいことであること
- ② 「ばかばかしい」「他愛ない」「呆れた」「尋常ではない」こと
- ③ 交渉^{かわり}によって生じる人間の感性の営^{いとなみ}為であること

この三点を満たせば落語という類のものではない。しかし「落語みたい」な演目であることを示す程度には使える条件ではなからうか。以下、この3つの観点から演目『谷繁』を読み解いてみる。

①身近にある面白く、楽しいことであること

演目『谷繁』において条件①と合致するシーンを三つほどピックアップして論じていく。一つ目は、戯曲冒頭のト書きである。



①-1 距離感

*二〇三〇年。第四次産業革命の真っ最中である。

場所は日本。深夜。

マンションの居間のような場所。

中央にガラクタが積んであり、各々に「ハイキ」の張り紙が貼ってある。

どうやら皆、粗大ゴミのようだ。

第四次産業革命の真っ最中とは、つまり今である。この設定は、先の条件①が表す（時間的な意味での）身近な距離感に該当するだろう。二〇三〇年とは近未来である。正確なところは分からない。しかし産業革命は益々進むだろうと想定しての設定である。ちなみに、このような背景を示す文言が直接台詞に出ることは少ない。しかし、落語がその語り口に創作当時の時代背景や精神を反映するように、ト書きは劇中の状況や交わされる対話に反映し、観客の想像力を刺激するのだ。演じる俳優達とイメージを共有するためにも重要な文言である。

ト書きの後半に、「ハイキ」の張り紙が貼られたガラクタが登場する。この粗大ゴミの中に、あらずじに書いたソレが居る。以下、ト書きの続きである。

*男がゴミの一つを見ている。

人間のような存在が横たわっているのだ。

全身緑色で、その背中に「ハイキ」と書かれた紙が貼ってある。

この戯曲の登場人物は三人。男、女、「緑色の存在」である。最後の「緑色の存在」とは、男が見ているガラクタの一つであるが、果たしてソレを人として扱うべきか否か・・・劇では当然俳優が演じるため人物と表記しているに過ぎない。この辺りが、この演目における②の入り口であるのだが、②については改めて後述する。

①-2 「谷繁」という名前

二つ目には、演目のタイトルである『谷繁』という名前について考えてみたい。以下、登場人物の三者が交わす会話からの抜粋である。

女 あの、
緑色の存在 はい、
女 名前？あなたの、



緑色の存在 や、失礼しました、谷繁と申します、
 男 良い名前ですね、
 緑色の存在 ありがとうございます、まあ、主人が勝手にそう呼んでるだけなんですけどね、
 実際は、
 女 どういうことですか？
 緑色の存在 本来、自分達は名前を持ちません、
 女 自分達って？
 緑色の存在 谷繁です、
 女 何、谷繁って？
 男 さあ、
 緑色の存在 全く、名前を付けないと気が済まない生き物なんですよねえ、人間というの
 は、、、や、失敬、
 男・女 ……

個体を識別するための名前なのか、種(?)の名称なのか。分からないことが多すぎて今一つ腑に落ちないが、男と女は「緑色の存在」のことを「谷繁さん」と呼ぶことにする。私達の身近な日常でも、同じようなことが行われているだろう。誰かの名前や経歴を知るのは大概本人の申告や又聞きでしかない。いちいち住民票や戸籍を取り寄せて確認することはまずない(最近ネットで検索ぐらいはするかもしれないが)。名前とはその程度のものであるにもかかわらず、呼ばれるとわけもなく嬉しかったりするから不思議なものだ。江戸落語において定番の名前である「熊五郎」(熊さん)や「八五郎」(八つつあん)も、キャラクターの類型を表す記号的な側面だけでなく、その呼び方で愛着や親しみが表現されていると言えるだろう。名前とは、寄る辺ない世界で他者と繋がるための合い言葉なのかもしれない。

タイトルの『谷繁』とは、つまり「緑色の存在」の呼称から取ったものなのだが、そもそもなぜ「谷繁」という呼称なのか。大した意味はない。「松風」でも「高砂」でも「養老」でも「小林」でも何でも良かった。語呂と雰囲気である。先にも論じたとおり、名前とはその程度のものであり、その程度のものであることが重要なのである。

①-3 人間とは何か

大きな問いである。まずは以下の台詞を読んで頂きたい。

女 あの、
 緑色の存在 何でしょう、



女 ロボット、なんですよ、
緑色の存在 そんな風に見えます？
女 だって、(コンセントを指して)
緑色の存在 あー、はいはい、これね、
女 電気で動いてるんでしょう？
緑色の存在 さあ、
女 え、だって、
緑色の存在 よく分かんないんですよ自分でも、充電切れたら意識無くなっちゃうんで、、、
 でもほら、皆さんだって、夜寝るでしょう、
男 確かに、
緑色の存在 そんなに違わないと思いますよ、
女 ……ちょっと、
男 何ですか、
女 いいから、

*男と女、別室へ。

果たして「緑色の存在」とは何なのか。AI技術の発達が人間の仕事を奪うと叫ばれて久しい。しかし、どこまで行っても計算機である以上、AIが人間の知性を越えることは起こらないと言われている。しかし将棋や囲碁で人間に勝ち、大学受験でさえ突破するAIが存在する昨今、むしろ問い直されるべきは「人間とは何か」の方ではないだろうか。あくまで劇中の虚構である「谷繁」と私達人間は、この問いによって繋がるのである。例えば、充電が不十分のためコンセントが抜けないように振る舞う「谷繁」は、人間からもっとも離れた存在であるにも関わらず、劇中で誰よりも人間くさい。一体、私達が「谷繁」ではないと何をもって言えるのだろう……ここに、この演目の楽しさと面白さの一つがあると私は考えている。



写真1 タテヨコ企画第37回公演「谷繁」撮影：神山靖弘

② 「ばかばかしい」「他愛ない」「呆れた」「尋常ではない」こと

次は条件②について見ていく。先にも若干触れたが、そもそも「緑色の存在」の設定自体が条件②を満たしている。しかし、ここで大切にしたいのは、そんな「緑色の存在」と、あるいはそんな「緑色の存在」を媒介して、登場人物達の中に（場合によっては観客とも）どのようなやり取り（コミュニケーション）が生まれるのかということである。この点を具体的に示す、三つのシーンについて論じる。

②-1 ソレをどう認識するか

芝居の冒頭、男が「谷繁」と遭遇する。間もなく別室から女が登場すると、以下の様な台詞が交わされる。

女 駄目よ、写真は、
男 分かってますよ、あの、
女 何？
男 これなんですけど、（緑色の存在を指さす）



ところで、昨年の公演ではこのシーンをどう演じるべきか、俳優達と稽古場で何度も話し合いを持った。舞台俳優はできる限り嘘のない芝居作りを目指す。そのほうが観客は虚構の世界をリアルに感じることができるからだ。人間を人間以外のものとして認識する芝居はさほど難しくない。しかし本来人間であるものを見て「果たして人間なのだろうか?」と迷う芝居というのは案外と難しい気がする。ところが、俳優がどう認識しようとも、その演技を観客がどのように受け取るか(認識するか)は別問題なのだ。

②-2 コンセント

*男、緑色の存在から、何かが出ているのを見つける。

男 長谷川さん、これ、
 女 何、
 男 これ、なんですか?
 女 コンセントでしょ、
 男 ですよ、
 女 馬鹿にしてんの?
 男 こいつから出えますけど、
 女 はあ?

*確かに、コンセントケーブルは緑色の存在から出ている。

男 ……家電?
 女 ……なんか、エッチなやつなんじゃないの?
 男 どういう意味ですか?
 女 知ってるくせに、
 男 だったら、もっと可愛く作るんじゃないですかねえ、
 女 挿してみたら、
 男 えー、
 女 物は試しよ、(コンセントのことだ)
 男 んー、

*男、コンセントを壁コンに挿す。

すると起動音らしき音と共に、緑色の存在が動き出す。



女 あらあら、
男 離れて！

*物陰に避難する二人。

緑色の存在、フラフラ起き上がると椅子に腰掛ける。するとお腹側にも「ハイキ！」の張り紙がある。見知らぬ二人に気がつく。

緑色の存在 ・・・・あの、
男 はい、
緑色の存在 どちら様ですか？
女 いえ、そちらこそ、
 ・・・

理解不能だった存在が、コンセント一つで理解可能になるのである。昨年夏、三つの会場（東京、大阪、静岡）で上演した全17ステージのすべてにおいて、「家電？」の台詞で笑いが起きた。さらに後半、「緑色の存在」とのファースト・コンタクトまで、俳優達の安堵・驚き・興奮を伴う交歓が観客を大いに盛り上げていた。いずれも狭い会場である。さらに観客は異物の存在がもたらす緊張感溢れる空間から、コンセント付きのごく普通の日常空間へ、そして未知（緑色の存在）との遭遇を果たす神聖な空間にまで変質する、場の空気も敏感に感じ取っていたに違いない。馬鹿馬鹿しくもダイナミックな展開であり、この短い芝居前半におけるクライマックスである。

②-3 同情／皮肉／ブラックユーモア

*緑色の存在は一人になると「ハイキ！」と書かれた張り紙を握りしめ、悔し涙を流す。声に気づいて戻ってくる二人。

男 元気出して、谷繁さん、
緑 ありがとうございます、
女 長谷川って言いますけど、私、
緑 これはどうも、谷繁です、
女 ちょっと今、話したんですけど、二人で、
緑 为什么呢、
女 あなたは何ゴミなんですか？
緑 はあ？
女 ですから、遺体なのか、死骸なのか、ただの粗大ゴミなのか、、、（ゴミの分別



が示された紙を見ながら)

緑 どういう意味です？
 女 書いてあるでしょう、(張り紙を指す)
 緑 待ってください、これはイタズラですって、
 女 そうなんですか？
 緑 見れば分かるでしょう、生きてますよ、
 女 でも、それ抜いたら、(コンセントを抜こうとする)
 緑 ダメダメダメダメ、
 男 そういう契約なんですよ、
 緑 契約とは？
 女 張り紙のあるゴミは、きちんと処分するようになって、
 緑 ……そんな馬鹿な話があるか！

声を荒げる「谷繁」だが、二人にも夜明け前に仕事(夜逃げ)を完遂するという事情がある。何ゴミかも分からない謎の存在相手に力尽くでコンセントを抜きにかかる二人。すると「谷繁」は、自らマンションを出て行くと高らかに宣言する。ほっとする二人を横目に、「谷繁」は同じく「ハイキ」の張り紙が貼られた冷蔵庫からビールを取り出すと、他のゴミ達と乾杯し飲み始めるのだった。充電完了を待ちながら、ついにはレコードまで聴き始めた「谷繁」に女は怒り心頭である。少し離れたところから、その様子を見ていた男が口を開く。

男 うち、来ます？
 緑色の存在 え、
 男 どうせ行く宛もないんですよ、
 女 竹原-、(*著者注：男の名字)
 男 なんか可哀想になってきちゃって、だって、
 緑色の存在 ありがとうございます！いやあ、ありがとうございます！
 女 駄目よ、
 男 どうしてですか？
 女 ルール違反だから、
 男 だって、どうせ捨てるんですよ、
 女 何を言いますか分からないでしょう、
 緑色の存在 大丈夫ですよ、何も知りませんから、私、あと、何にもできません、私、ほんと、役立たずなんですよ！
 男 こう言ってますけど、



来だが、第四次産業革命が進行中の現代にとっても近い身近な時間である。夜逃げの引っ越し業務という誰にも言えない仕事をする男と女には、もちろん事情がある。独り身の女は妻子ある会社の社長と不倫中だ。男はあえて定職に就かず人知れず小説を書いている。男のほうは割と真つ当な夢ある若者のように聞こえるかもしれない。しかし昨年の公演で男を演じた劇団員はどう見ても四十オーバーだ。彼女とも別れ話が持ち上がっており、まるで冴えない状況なのである。そんな二人に対して、自身の運命（廃棄処分）を悟った上で「谷繁」は、親切心から以下のように語り出すのだ。

緑色の存在 いい人ですね、お二人共、

女 別に、そんな、

緑色の存在 最後に話をしたのが、お二人で良かったです、

男 そんな風に言われちゃうとなあ、

緑色の存在 じゃあ、一つだけ教えましょう、竹原さん、

男 何ですか？

緑色の存在 彼女とは別れなさい、

男 ……は？

緑色の存在 とんでもないことになりますよ、今、手を切っておかないと、

男 ……

女 どういうことですか？

緑色の存在 竹原さんの為を思って言ってるんですよ、私は、

男 えーと、

女 （大笑い）え、え、何で分かるんですか、そんなこと？

緑色の存在 ここだけの話ですけどね、私、世の中の十年先ぐらいのことが見えるんですよ、

女 すごい機能じゃん！

男 ……

「谷繁」の実に便利な機能が明かされると、女は身勝手な未来予想図を聞き出したり、一転「谷繁」を教祖のように祭り上げたりと狂気の世界へ突入する。同情的だった男も堪忍袋の緒が切れコンセントを抜こうとする。しかし、それでも「谷繁」は最後まで粘り強く、男への説得を試みるのだ。

男 とにかく、詐欺師の手口ですよ、こんなこと、

女 失礼でしょう！

男 よく考えてください、長谷川さん、

女 ……



- 男 これは、電化製品です、
- 女 だから？
- 男 自分の未来を、電化製品に托していいんですか？
- 緑色の存在 お察しますよ、お気持ちは、竹原さん、
- 男 ・・・
- 緑色の存在 もちろん、私の言うことだって百パーセントの正解率じゃありません、特に十年以上先のことについてはね、
- 男 当たり前だよ、
- 緑色の存在 でも、ここ一、二年とか、少し先のことなら、ほぼ百パーセントなんですよ、経験上、
- 男 ・・・
- 緑色の存在 ねえ、竹原さん、
- 男 言うな、聞きたくない、
- 緑色の存在 変えられるんですよ、未来は、
- 男 ・・・
- 緑色の存在 確定した未来なんてありません、多くの物事は、その本質は、誰にだって切り開くことができるんです、
- 男 それっぽいこと言うよねえ、
- 緑色の存在 小説、書いてるでしょう、竹原さん、
- 男 ・・・
- 緑色の存在 読まれてますよ、百年後も、
- 男 え？
- 緑色の存在 あなたの書いたものは、この国の文学史に残ります、
- 女 すごいじゃない、
- 男 ちょっと待って、
- 緑色の存在 ただし、それは竹原さんが生きていれば、です、
- 男 ・・・どうして、
- 緑色の存在 ・・・
- 男 どうして、知ってるんですか、小説のこと、ネットにもアップしたことないのに、
- 緑色の存在 書きながら、どんどん変わっていくでしょう、小説の筋は、
- 男 ・・・
- 緑色の存在 一緒ですよ、
- 男 え？
- 緑色の存在 未来は変わるんです、変えられるんです、



男 . . .

ここに採り上げた台詞の前後も含めて、舞台終盤における三者の掛け合いに、③が示す人物の暮らし（背景）が反映した行為を描いたつもりである。俳優にとっての“見せ場”であると同時に、観客にとっては“見どころ”である。最終的に男は「谷繁」のコンセントを抜き、彼女と別れないことを宣言する（彼女ヘラインする）。コンセントを抜かれた「谷繁」は動きを止め元の状態になるが、次の瞬間、男も動きを止める（=死）。「谷繁」の予言が成就するのである。最終的に「谷繁」と同じ粗大ゴミが一つ増えるという、人間存在の儚さを垣間見せる皮肉な幕切れである。

○まとめ

ここまで演目『谷繁』について、麻生の言葉から引き出した三つの観点から作品の内容を俯瞰しつつ、如何に「落語みたい」な演目であるかを論じてきた。手前味噌な内容で誠にお恥ずかしい限りであるが、紙面から舞台の様子的一端でも垣間見て頂けたならこれ以上の喜びはない。

先に書いたとおり、そもそも落語と演劇は全く違う表現ジャンルである。しかしこれだけ「落語みたい」な演目なのだから、いつの日か落語として上演される日を夢想する今日この頃なのである。やりませんか、どなたか。



◎上演記録

タテヨコ企画第三十七回公演『谷繁』 作・演出 横田修

【東京公演】

時・・・二〇一九年八月二十六日（月）～九月一日（日）

於・・・sancha teatretto（東京都世田谷区）

【大阪公演】 *一般社団法人表現者工房協力公演

時・・・二〇一九年九月十三日（金）～十五日（日）

於・・・表現者工房（大阪市生野区）

【藤枝公演】

時・・・二〇一九年十月十二日（土）～十三日（日）

於・・・白子ノ劇場（静岡県藤枝市）

◎キャスト

『稽古前の時間、あるいは超能力に関するメモ』

市橋 市橋朝子
加藤 加藤和彦
西山 西山竜一
館 館智子
久行 久行しのぶ

『谷繁』

男 西山竜一
女 久行しのぶ
緑色の存在 館智子

◎スタッフ

舞台美術／濱崎賢二（青年団） 音響／中村光彩 照明／中佐真梨香（空間企画）
宣伝美術／水主川緑 舞台写真／神山靖弘
制作／三國谷花（PATCH-WORKS／舞台芸術創造機関 SAI）〈東京公演〉
尾崎商店〈大阪公演〉 若旦那家康〈大阪公演〉 タテヨコ企画制作部
制作協力／一般社団法人表現者工房 池田直隆 製作／タテヨコ企画
協力／（株）アートエンターテイメント 空間企画 青年団 （株）ナノスクエア
助成／平成三十一年度芸術文化振興基金助成事業